

## 『山上宗二記』から見た千利休

渡辺 誠 一

## 一、利休の愛弟子宗二

千利休には、利休七哲と云われている、蒲生氏郷・高山右近・細川三斎・芝山監物・瀬田掃部・牧村兵部・古田織部を始め、多くの門弟がいた。その中でも特に山上宗二は、利休から二十余年間茶の湯の稽古を受け、利休流の侘び茶を忠実に実践した唯一の愛弟子であった。

山上宗二の人物像については、あまり語られていないし、またそれを伝える史料もあまりない。後年、寛永十七年（一六四〇）長闇堂久保利世が、『長闇堂記』で山上宗二の風貌と性格を次のように記している。

かの山の上の宗二、さつまやとも云し、堺にての上手にて、物をもしり、人におさるる事なき人也、いかにしても、つらくせ悪く、口悪きものにて、人のにくみしもの也、小田原御陣の時、秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、その罪に、耳鼻をかせ給ひし、・・・

〈耳鼻をそがれた茶人〉の話は、茶の湯に携わる人々には広く知れ渡った逸話であるが、この記事は、宗二の風采や性質、それに宗二の残酷な死を具体的に語った唯一の貴重な史料である。山上宗二は、天文十三年（一五四四）泉州堺の薩摩屋という商家に生まれた。彼の一家は、堺の南にある山の上に住んでいたもので、山上と呼ばれていた。宗二の父親宗壁は、豪商の主人として商売に精を出す一方、茶の湯にも励み、一廉の茶人として通っていた。

宗壁は、永禄二年（一五五九）八月十二日朝、大坂道悦と津田宗達を客に迎え、床に虚堂の墨蹟を掛け、高麗茶碗を使つて口切りの茶会を行つており、また同年十二月一日朝、千宗易・天王寺屋道叱（宗達の弟）・津田宗及・武野新五郎（紹鷗の息子宗瓦）・山上宗二を客にして茶会を催している。利休・道叱・宗及など、当時の代表的な茶人を招いていることから、宗壁の数寄者振りを窺い知ることができる。また、紹鷗の息子新五郎と宗壁の息子宗二が同席しているのも興味深い。当時新五郎は十八歳、宗二は二十四歳であった。堺衆の代表格であり、そうそうたる茶人たちに若輩の二人が加わつた茶会であった。宗壁のこの茶会に若年の新五郎と宗二を同席させ、宗及の隣、四客に新五郎を、その隣に詰めとして宗二を座らせたのは、当然、亭主宗壁と客利休・道叱・宗及との相談の結果であるが、宗及の提案によるものであった。新五郎は六歳で父親紹鷗と死別しており、茶の湯に関しては、津田宗及が何かと面倒を見ており、侘び数寄の指導を行つていたのである。

宗二が利休の門下に入ったのは、永禄八年（一五六五）、満二十一歳の頃である。宗二はすでに新進気鋭の茶人として注目され始めていた。従つて入門と同時に、利休の門弟として恥じることのない活躍を始めており、堺衆の中心的人物を客に迎えて茶会が催せる程の力量を身につけていた。

山上宗二は終生、師利休を絶対的に信頼し、尊敬し続けていたが、利休もまた宗二には何かと目を掛け、細かい愛情を注いでいた。

天正九年（一五八一）九月三日朝、宗二は堺今市町の利休の座敷を借りて、南宗和尚（春屋宗園）・海会和尚（古溪宗陳）・津田宗及を招いて茶会を催した。

一 小板 風爐 波ノ絵

一 床二虚堂墨跡、巻ナカラアリ、

此字、従大坂扇や宗二被取候、宗及つかいヲ使候也、

宗易座敷両和尚へ御目ニカケラレ候、飯前ニ宗易かけられ候、

一 茶 こからすの天目、黒臺二、カウライ茶碗

一 土物之水さし 備前水下

千原弘臣氏によれば、山上宗二が自宅を使わず、師匠である利休の座敷を借りたのは「虚堂禪師の達磨大師七百年忌の拈香語を宗及の幹旋により大坂の扇屋から入手したからである。この墨跡は国宝として大徳寺に伝来している。彼はそのようなやかましい墨跡であることとお客様を敬って、宗易邸にて茶事を行った」のである。

当日、この墨蹟は、席入りの時には軸飾として床に置かれていた。懐石料理が出される前に、利休が座敷に出て、この墨蹟を床に掛け、両和尚に披露した。宗二は後年この墨蹟の法語について、「禪宗の眼目とも云うべきものである」と記している。

亭主役の宗二と半東役の利休とが一体となり、茶の湯に於いても、禪の世界に於いても互いに親交を深めていた知己を招いての茶会であった。互いの心と心がしつかりと結び付いた、まさに直心の交わりであった。

天正十年六月、本能寺の変で織田信長が横死すると、間もなく豊臣秀吉が信長の後継者となったが、それと同時に、信長の茶頭を務めていた利休もまた、秀吉の茶頭へと替わった。

山上宗二は、秀吉からも一廉の茶人として認められるようになり、秀吉の茶会には必ず顔を出すようになり、秀吉から大壺（葉茶壺）を拝領するほどまでになった。宗二は、この頃には既に秀吉の茶頭になっており、瓢庵という雅号を用いるようになっていた。しかし秀吉

の茶頭になってから幾らも経たない内に、宗二は茶頭の職を失い浪人となった。宗二が浪人となった理由を明確にすることはできないが、宗二の狷介な性情が禍して秀吉の逆鱗に触れるようなことをしてしまったことは確かである。

天正十一年十月九日夜

山上宗二一人 牢人之時、

北国へ被越候刻、

風炉 フトン

香炉、持出テ、見せ申候、

津田宗及は宗二ひとり招き、風炉に蒲団釜を懸け、秘蔵の香炉（不破之香炉）を持ち出して見せている。この夜会は、浪人となった宗二が北国へ向かうにあたり催された送別の茶会であった。

宗二は暫くの間金沢の前田利家の許に留まっていたようであるが、天正十二年四月には堺に戻って来ていた。宗二は同月二十二日宗及の茶会に住吉屋宗無と共に招かれ、朝会を楽しんでおり、五月十日の朝会にも参加している。この時宗及は「後二宗二も被来候」と付記している。宗二は途中から参加したのであろう。

秀吉の宗二に対する激昂は一時的なものであり、半年後には秀吉の勘気もだいぶ緩んでいたと見做さなければならない。しかし、秀吉は宗二を完全に許していた訳ではない。

天正十二年五月二十日、山上宗二は久方ぶりに茶会を開き、宗無と宗及を招いた。この時の「宗及他會記」には、「牢人之已後也」と記され、宗二がまだ浪人の状態であったことが判る。

同年六月九日、秀吉は墨俣で茶会を催した。この時宗二は、宗及・宗無と共に招かれた。この茶会は、小牧・長久手の戦いの最中、秀吉が尾張加賀野井・奥城など織田信雄の居城を落とし、竹鼻城を水攻めで攻略した翌日に行われたものである。宗二は、秀吉の許に完全復帰していないにしても、秀吉の近くに居られる状態になっていた。しかし、天正十三年五月十二日に催された宗及の朝会を最後に、宗二の名前は「天王寺屋會記」から完全に消えてしまった。もともと「宗及茶

湯日記 他会記」は天正十三年十月二十日で終わっている。その後のことを捉えるのは困難であるが、それでも、『宗及茶湯日記 自会記』は、天正十五年三月九日まで続いている。宗二はどこへ行ってしまったのか。何が起こったのか。宗二はまだ四十二歳である。茶人としての活躍はこれからという時期である。宗二の茶人としての活動が停止してしまつたとは思われない。茶会記に記録されなかっただけのことかも知れない。いづれにしても、加賀前田家関係の一連の文書から、天正十三年六月から同年八月頃までの間、宗二が前田利家の奏者として活躍していたことが判明する。

これら一連の文書と宗二の動向については、拙著を参看して貰うことにするが、その内の一書は、天正十三年（推定）八月五日付、賀茂別雷神社社務所宛宗二の書状である。これによれば、宗二は金沢より上洛して、羽柴秀吉の吏僚安威守佐や賀茂社使と共に秀吉に拝謁し、賀茂別雷神社の社領の件を愁訴した。秀吉は上機嫌で宗二の嘆願に耳を傾けていたが、越中佐々成政征伐を目前にして少々落ち着かない状態であつた、と伝えている。

この書状の年号に間違いがなければ、秀吉は天正十三年八月七日、八千人の軍兵を従えて、出陣のため淀城から京都に上洛しているから、宗二は恐らく淀城で秀吉に面会し、賀茂別雷神社の社領の確保を嘆願したのであらう。宗二にとつて、茶人としてではなく、奏者として、このような政策的な問題について秀吉と直談判したのは初めてのことであらう。宗二のこうした豊臣政権への関与は、図らずもそれから八ヶ月後、天正十四年四月六日、羽柴秀長が大友宗麟に言つたと伝えられる「内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候、…宗易ならでは、関白様へ、一言も申し上げる人これ無し」という言葉と同時に、豊臣政権における利休の権勢を思い出させる。これは、当時の茶の湯が豊臣政権内でいかに重視されていたか、当時の茶頭の地位や立場がいかに高いものになつていたかを如実に示している。

天正十三年十一月六日、宗二は久方ぶりに茶会を催し、松屋久好を

招いた。場所は椿井二帖半と記されている。この座敷がどのようなものであつたの明確には判らないが、林小路町二位にあつた二帖半であらうと推定されている。

天正十四年九月二十八日朝、山上宗二は大和郡山城に姿を現し、城主大納言秀長のために茶を点てた。松屋久政は当日の茶会記に「郡山曲音御屋敷ニテ、宰相様江堺山（上）サツマヤ宗二御茶上ラルル」と記し、茶会の模様を詳細に記録した。

同廿八日、午刻、久政壹人ニ御茶給ル、一尺七寸ノ爐、眞ノフチ、

コケ灰、自在、秘藏ノ釣物、輪口四寸ホド、立口四寸斗、

テツク、クワン、水四升アマリ入ヘシ、圓座アリ、

カラカネコモリフタ、

カマノハツル

虚堂墨跡、横一間、ワキ三寸ツツホトアク、字大サ二寸五分程ツ

ツ也、十五クタリ半、字數七十七、印ハナシ、上下茶、中アサキ、

一文字ムラサキインキン、

眞中二大ツホ、宇治橋ト云名物也、六斤入ヘシ、少鷄メ、ロクロ

三ツ、遠山ナシ、土イレ上ニ（上々）、底ニ判アリ、洧如此ノ字ア

リ、イササカモ疵ナシ、ヲシアハセアリ、ヲライ白金地カラクサ、

口ノ緒アサキ、イカニモツメテカタワナニ、

扱先ウス茶ヲ給ル、水指ハ小形ナル備前、紹鷄ノスリフタハジキ

也、茶桶・瀬戸茶碗・洗茶巾・折溜茶杓、飯過テ、火ヲナヲサル、

扱、壺ノ内ハ入ル、又墨跡ハ、手洗ノ間ニ巻テ、又水指、壺ノ口

ヲライ取、横ニネサシ見セラルル、扱、壺ノ内ハ入ル、又水指イ

ツル、大壺ハウス茶過テ、宗二壺ヲ取ヲロサルル、肩衝四方盆ニ

二種出シヲキ、眞ノ茶、フク輪ナシ、建蓋アメ色、臺・布・笥・

杓入テ、マエノ水下・肩ツキトリテ、手ハ入、扱、建蓋ヨリ茶杓

盆ノ西ノ方ニヲカルル、但我方左ノ方也、次ニ茶筌水下ノ先ニ置、

次ニ茶巾サハキ、水指ノ上ニ二度目ノススキ、茶筌入ナカラヲロ

シ、臺キンセラルル、扱、壺ヲ取、フタノ前ノ方ニ置、ユヒ底ニ

二ツ見ル、茶ハ極ム、如何ニモ如何ニモタフタフトスクイ、四ツ五ツ入、湯一柄杓、スイ茶也、初口久政、次也、宗二取テ參ル、又圍ヘ返シ、呑間ニ壺キンシテ出サルル、見ル間ニ何モ水指マテ入ル、扱、カタ衝、宗二スミヘナラサルル、袋ハカウシノ金ラン、金ハケテ難見、古キ也、ククリノ緒紅也、イカニモ短クツメテフトシ、肩ツキハ中ノカシラ、クチヒロク、ヒネリ返シ見事、何モ何モ見事也、帶フトフト五分ホト行ツカス、見事也、ヘキ土也、胴フトク也、一段好上、藥ナシノ土、少赤メ也、

杉ノ折敷、内赤コキ・・・

また翌十月六日の口切の茶会の模様を次のように記した。

大納言様へ、 中坊ニテ

ヲカヤ コヤ キヌヤ ハントウヤ ナハヤ

道か 宗有 壽閑 常勘 宗立

右五人口切御茶上ラルル、我等ヲ召テ御茶被下ル、忝キ事共也、

茶堂堺宗二

この頃、宗二は暫くの間大和郡山城で豊臣秀長の茶頭を務めていたようである。宗二は、前田利家の奏者として活躍していたが、賀茂別雷神社の社領収納の件、大徳寺興臨院領地知行回復の件が一応の解決を遂げ、その結果が判明した段階で、奏者を辞め、再び茶人の生活に戻っていたと思われる。しかし、天正十四年に入り、その期日を確定することはできないが、九月以前に、宗二はまたしても秀吉を怒らせるようなことをしてしまった。秀吉の激昂は、前にも増して激しいものであった。利休は、大和郡山の城主、豊臣秀長に相談し、畿内に居られなくなった宗二を茶頭として預かって貰うことにしたのである。宗二は暫くの間秀長の許に留まっていたが、秀吉の知るところとなつて、高野山へと逃れた。山上宗二は、十月六日の右の茶会を最後に、すべての茶会記から姿を消してしまった。

宗二が秀吉の勘気を被つた原因を明らかにする史料は何もない。想像するばかりである。前年宗二は、前田利家の奏者として秀吉と直談

判をしたが、その経験から、再び秀吉の面前で政策上の問題を持ち出し、批判がましいことを言ったのか、政治問題に首を突っ込み、なにか生意気なことを発言したのか、または、茶の湯に係わる問題で、茶の湯の専門家を自負する宗二が、天下一の茶人を自負する秀吉に対立し、譲歩しなかつたためか、何れにしても、宗二の性格が大きな原因を生み出したようである。

天正十四年十月か十一月の頃、宗二は秀吉の目の届かない高野山へと逃れた。稲垣休叟は、『茶道筌蹄』に於いて山上宗二を次のように説明している。

堺山上の人、利休門人にて、豊太閤の茶道なり、一瓢庵筆記を著す、太閤御前にて臺子手前を仰付られしに、草の手前にて仕りしとて、鼻を削つて逐放されるにより、高野山に隠れる、其時の狂歌に、

眞の茶を草に点たるとかめにて  
はなかはなくて落る御茶道

この説明は、宗二の一面を良く捉えてはいるが、真実ではない。ただ、高野山に隠れたという記述には間違いがない。天正十六年記述の伝書に

前関白太政大臣秀吉公様蒙御勘道節高野住山中・・・

今度高野罷出候節・・・

とあるように、秀吉から勘当され、追跡され、高野山に逃げ隠れたのである。

宗二は高野山の宿坊安養院に逗留していた。

今度高野罷出候節當安養院并成就院

色々就テ懇望ニ廿年之稽古ヲ漸

三百日ニ令メ指南師ヨリ被ルノ申渡通

一卷ニ仕兩人へ渡候・・・

高野山に落ち着いた宗二は、安養院の院主勢尊法印と成就院の院主阿闍梨良聖の兩人に茶の湯を教え始めた。この茶の湯の稽古は三百日

に互って行われた。宗二はこの稽古が終った段階で、兩院主から懇望されて相伝の秘事を書き与えた。これが、今日『山上宗二記』と称されている茶の湯の秘伝書なのである。

宗二はこの兩院主を始め、息子伊勢屋道七・雲州岩屋寺・桑山修理太夫・林阿弥・板部岡融成・皆川山城守広照などにこの秘伝書を伝授した。現在この秘伝書に関する諸写本は六十種近く存在する。この秘伝書の成立過程などについては、拙著『山上宗二の世界』や『山上宗二記研究』(一)・(二)・(三)を参照して貰うこととして、論考を進める。この論考では、宗二が小田原で惨殺される二カ月前に伝授した皆川山城守宛(尊経閣文庫所蔵)、天正十八年二月吉日の年記をもつ写本をテキストとして使用した。

## 二、『山上宗二記』に於ける「當世」と「雜談」(ぞうだん)

山上宗二は、既に記したように、二十余年間に互って千利休に師事し、忠実な弟子として茶の湯の稽古に精進を重ね、導師利休に問ひ質した様々な秘事を熱意ある数寄者に秘伝書として伝授した訳である。

『山上宗二記』を通読すると、村田珠光・鳥居引拙・武野紹鷗・千利休・山上宗二という一連の侘び茶の湯の系譜が強調されていることに気が付く。『山上宗二記』の冒頭で、

此一卷先師珠光之一紙目錄

即 紹鷗 引拙 令追加時過半除捨書

改一卷是也 拙子宗易導師二問置

廿四年之稽古之程令今案畢

と記され、更に少し進んでから、

珠光ハ目聞ヲ

能阿弥二問究即末子二相伝ス

引拙ノ代迄ハ珠光風鉢也 紹鷗

之時悉ク改令追加畢

と述べられ、更に又序文の終わりの部分で、

右此一巻

大形ハ珠光ノ一紙目錄写也 其後

紹鷗令追加畢 紹鷗遠行

卅四年以来ハ宗易先達也

右之導師二廿余年問置

候密伝書改之今案等

是也

と繰り返し述べられ、「珠光之一紙目錄トハ……」、「紹鷗令追加一卷ハ……」と強調されている。本文に入ってから、「引拙・紹鷗 是ヲ專二度々嚴ル……」、「珠光并引拙 紹鷗 宗易此衆心ニ被懸茶道具專也……」、「珠光ハ四疊半 引拙ハ六疊敷也 三疊敷ハ紹鷗ノ代迄ハ無道具……宗易異見候……」などと、珠光・引拙・紹鷗・利休という一連の名前が頻繁に使用され、強調されている。山上宗二は、村田珠光を侘び茶の開山、鳥居引拙を「珠光風鉢」を受け継ぐ名人・目利、紹鷗を「當世之堪能之先達 中興開山」として尊重し、こうした「古今ノ名仁」を通して利休が侘び茶の湯の目利・名人となり、その完成者となったことを伝えようとしている。つまり、珠光から紹鷗までの茶の湯の秘法・秘事を伝えながら、利休の侘び茶の神髓を伝えたいのである。今日では侘び茶の系譜として珠光・紹鷗・利休の名前を多くの者が知っているが、こうした系譜は、当時まだ誰も知らないことであり、誰も試みなかったことである。

宗二は、「古今の名仁」たちを尊重し、彼らの目利した道具や所持した経緯のある道具を「天下ノ名物」、「天下無双ノ名物」、「天下ノ一也」などと高く評価しているが、名人の所持した道具であるということだけで、ただ闇雲に評価を下した訳ではない。「古人名物トテ用之」「大根ノ絵」(牧谿自画自賛)は、「當世ハ如何 不用」と否定している。紹鷗所持の「えんさかたつき」は、「姿も大きさも趣のある茶人である」と言いながらも「口少広力難力」などと批判している。こうした例は

隨所に見出される。「尼崎臺・・當世大名道具也 侘數寄ニハ如何」「コン子ン殿茶碗 青磁ノ物也 楊貴妃ノウカイ茶碗ト云旧説アリ 但し不審 當世ハ如何」「平雲 宗達平釜・・當世ハ有テモ不要」「右大海之事 不知其數 但當世ハ好惡ニ不寄 何モ數寄ニハ不用 昔中古ニハ名物トテ用也」・・・宗二は、「當世」という言葉を用いて道具の評価を下している。

茶の湯道具の記述に於いて、山上宗二はその善し惡しを「當世」という言葉を基準にして、その価値判断を行っているのである。「山上宗二記」を読む際には、この「當世」という言葉に注意しなければならぬ。この「當世」に関しては、茶の湯懇話会で既に論議され、優れた論考も発表されているが、「當世」という言葉は、国語辞典の示す「現代・今の世」を意味する時間的な限定ではない。天文年間に成立の伊勢氏の故実書『酌并記』に、「主人貴人、御茶を給る事。当世のはやり物なり。」という文章がある。ここで使われている「当世」は、まさに国語辞典のしめす「今の世」、つまり、この記事の書かれている頃を限定する言葉である。しかし、『山上宗二記』で使用されている「當世」は、利休が追究した新しい茶の湯、利休流の侘び茶に於ける価値基準を示す言葉として捉えなければならぬ。「當世ハ如何」と言った場合、それは、「現在利休が追究している侘び茶の湯に使用するのは如何なものであるか」という意味になる。利休の侘び茶を中心に価値判断を行っているのである。

もし「當世」を「今の世」と時間的制限内で捉えた場合、天正十年代初頭は侘び茶が一般に流行していたとはいえず、まだ利休流は固定化した当世の茶の湯になっていなかった。「其外当代幾千萬之道具并小道具迄皆悉 紹鴎の目聞ヲ以テ被出好也」とあるように、それ迄は紹鴎の目利又は好みによって選出された道具が茶の湯の標準型になっていた。利休流が徐々に浸透していったにしても、また宗二自身、宗易流が「當世の風鉢に」なつたと記していたにしても、実際にはまだ以前のままの茶の湯が行われていたのである。例えば、宗二は、「惣別茶碗

之事 唐茶碗ハ捨リタル也 當世ハ高麗茶碗 今焼茶碗 瀬戸茶碗以下迄 ナリ 比サヘ能候ハ數寄道具ニ候也」と記述し、「當世」の茶碗は、高麗茶碗・今焼茶碗・瀬戸茶碗である。比（大きさ）さえ良ければ數寄道具になり得る、と強調している。しかし実際には、後に述べるように、天正十年代前半は、瀬戸・今ヤキ・伊勢など和物の茶碗が頻繁に使われるようになってはいるが、全般的には唐物天目・唐物茶碗・高麗茶碗がその主流をなしていた。茶室も二疊半敷・三疊敷などの座敷を使って侘び茶をしている反面、一尺七寸・一尺八寸の炉、自在、押板・二牧谿龍虎三幅一對、二疊半座敷で大囲炉裏など比較的古い流儀の茶の湯が行われていた。利休流はまだ「現代の茶の湯」になつていなかったのである。

『山上宗二記』では、時には利休が直接価値判断を下したような表現も用いられている。「珠光鍋釜・・但當世ハ如何ト宗易非言」、「釣船・・當世は如何・・道陳昔所持・・宗易舟ノ内ニテ數寄道具之由被申候」。宗二はこれらのことを利休から直接聞いたのであろう。利休は珠光を尊敬し、心の師として仰ぎながら、師の教え通りに修行したが、自分の美意識に適わない道具は、仮令珠光鍋釜のような「古今之名仁」所持のものであろうとも否定してしまっている。利休の侘び化の厳しさが感じられる表現である。宗二が利休の雑談（ぞうだん）から多くの教訓を得たことは、『山上宗二記』の随所で窺うことができる。

那ら志者かたつき

此壺引拙茄子ヲ被出テ後モ猶一種ニ

被棄也 壺ノ様子宗易雜談能承

候 拙子ハ不見候 壺ノナリ下

フクラニ聞ヘ候 藥あめ色ニ一段コク候

藥けくミ候 藥こひ登云事ニ

なら志者登名越付ルナリ 那れハ

満さらて戀乃ま佐らんと云心歟

此壺數寄ノ方ニ是カ天下一歟  
天下ニ三ツノ名物也

一 宮仕之事 大名歟 又ハ唐物持ハ  
兒之様ニ髪ヲ曲タル子ヲ袴ハカリ  
キセテツカフ 又喝食此二人ヲ用ユ  
武士若衆ハ不遣 次二十二 三ナル  
沙彌ヲ宮仕ニ遣フ 是ハ貴人  
凡人 下々迄誰ニモ似相候 是  
從坊主之傳也 此來宗易被申  
候ハ 二疊半持程ノ佗數寄ハ亭主ノ  
宮仕可然

一 客人振之事 大方在一座建  
立ニ 條々密傳多之 一儀為初心ノ  
紹鷗被語置者也 但當時宗易  
被嫌候 端々夜話之時珍ク被申  
出候 第一朝夕寄合間成共 道  
具之開又ハ口切之儀ハ不及申ニ  
常ノ茶湯成共路地ハハイルカラ  
立迄 一期二一度之參會之様ニ  
亭主ヲシツシテ可キ威ト也 公事  
之儀世間之雜談悉無用也

利休の雜談と思われる箇所を三例挙げたが、その三例目で宗二は、利休が紹鷗の「一座建立」という言葉を嫌ったと記している。「一座建立」も「一期二一度」(一期一会)も今日では誰もが知っている言葉であるが、紹鷗は客人として振る舞うべき心得は「一座建立」にある、と初心者に語ったという。しかし利休は、こうした振る舞いについて語れることを嫌われ、「一期二一度之參會」という言葉に変えた。つまり、

どのような茶事であろうとも、客は露地へ入ってから退出するまでの間、これが生涯に一度限りの茶事だと心に刻み込み、亭主に深く心を注ぎ、亭主を畏敬すべきである、というものである。利休の言葉は更に続き、茶の湯の雜談は風雅の道にふさわしいことを話すべきである。つまり、「我佛 隣ノ寶ヲ 婿舅ト 天下ノ軍 人ノ善惡」を話題に出していけないのである。亭主としては客人を心の底から敬うべきである。貴人や茶の湯の上手にたいしては勿論のことであるが、普段日常的に寄り合うような人々に対しても、心の底ではその人が名人であるかのように思うべきである。こうした心掛けは、結果的には「一座建立」を成立させる必要不可欠の要件であるのだが、利休は「一座建立」という言葉を使うことを嫌ったと云うのである。この箇所は紹鷗流から利休流へと移行する茶の湯の有り様が窺える貴重な部分である。

一 ハシタテ 宗易ニ在

此壺丹後ヨリ出候 . . . .

名人之一世

所持ノ壺ナレハ御茶之事并ニ

御壺ノナリ 土 藥何モ言語ヲ

絶シ候 . . . .

宗二は、「名人之一世所持ノ壺ナレハ . . . .」と強調している。恐らく宗二は利休から直接、この「橋立」の壺は大変気に入っている、生涯所持するつもりだ、と聞いたのであろう。これを聞いたのが利休晩年のことであれば、別に取り立てる必要もないのだが、「山上宗二記」の道具の記載事項は、竹内順一氏の研究によれば、天正十年から十四年の終り頃までの情報が基になっている。他の諸写本も全く同じ表現又は、「名人の一世の壺なれハ . . . .」、「利休一生所持の壺なれハ . . . .」、「利休一生所持壺なれハ . . . .」と同じような表現で記されている。但し江雪斎宛伝書(天正十七年己丑二月)では、「名人の宗易所持なれば . . . .」(「茶道古典全集」所収)、「三日月も無双乃壺なれ共松嶋と

ハ替り、二つの内松嶋よきと古人云伝る也。」(堺市博物館所蔵)と、また安養院宛伝書では、「三ヶ月も天下無双の出来なれとも此松嶋とハカハる也 古人も兩壺のうち数寄々々云伝る也」(斎田記念館所蔵)と記され、「一世所持」の表現は使われていない。

利休は、葉茶壺「橋立」を天正四年頃入手したものと思われる(天正四年、「天王寺屋会記」に「大壺 アミヲカケテ」、同五年、「今井宗久茶湯日記抜書」に「橋立ノ大ツホ アミカケテ」と明記)。この葉茶壺に寄せる利休の愛着の情は、宗二に、生涯手放せない道具であると言ひ伝えるほど、絶大なものであった。この茶壺は、「東山殿此壺被召上時 文ヲモミス先壺御覽被成シニ付テ・・・」とあるように、東山御物であった。その後織田信長の手に渡り、それから利休の手に渡ったのである。「山上宗二記」の記事と、利休最晩年の手紙、「橋立文」と「横雲文」とを合わせて考察すると、利休の「橋立」茶壺に対する愛惜の念が如何に深いものであったかが判る。

天正十九年二月四日 聚光院宛

此はし立の壺貴院へあつけ申候

御上さま御錠にて候當はんの

参候共御わたしあるましく候・・・

(「橋立文」)

二月五日 聚光院宛

此つはあつけ申候われわれかはん

にて御さなく候ハハしせん取ニ参候共

御わたしなさるましく候一日のつは

三つその分にて御さ候・・・

(「横雲文」)

この両手紙については、小松茂美氏によって詳細な論考が行われ、「橋立」壺の召し上げ事件が利休弾劾の罪科の一つに付け加えられたが、茶器収集欲に取り憑かれた秀吉にどんなことをしても「橋立」を渡すまいとする利休の覚悟の程がひしひしと伝わってくる文面である。

小松氏は「橋立文」の「御上さま御錠にて候當はんの参候・・・」を「御上様御錠にて候。当番の参り候とも・・・」として、秀吉の命令で「橋立」を聚光院に預けたと読まれている。この箇所を「御上様の御錠だと言つて当番が参つても・・・」と読み取ることができないでだろうか。利休は秀吉の命令で「橋立」を聚光院に預けたのではなく、秀吉に手渡さないために自らの意志で聚光院に預けたのではないだろうか。何れにしても、「山上宗二記」の中で、「一世所持ノ壺」と記された、生涯死ぬまで人手に渡さないという利休の決意は、幾年経つても少しも衰えず、それどころか益々深まった。自分の生命に変えても守り通そうとするその覚悟の程は、「橋立」への愛着もさることながら、秀吉への反抗心、理不尽な追求を加える秀吉への抵抗の現れでもあつた。

### 三、師匠に倣つた修行

山上宗二は、再三述べたように、二十余年間利休に師事し、茶の湯の稽古・雑談などを通して利休流の茶の湯・利休の美意識を獲得し、それを自分のものにしていった。宗二は利休の美意識に基づいて茶の湯道具を目利し、「當世」という言葉を用いて価値判断を下した訳であるが、具体的には天正十年以降の利休の茶風を「當世」としたのである。宗二は、「六十一」の年より替分別 當世の風躰二なる 此處 此一卷の一大事なり・・・宗易流に数寄之仕様と云密伝在・・・と記し、天正十年以降利休の分別が替わり、當世の茶の湯の風躰になった。この事が「山上宗二記」のいちばん大切なことであると特記している。これについては後程詳述するが、天正十年以降利休流が普及し、茶の湯の流儀となつたと云うのである。従つて、「山上宗二記」では利休流茶の湯の真髓は勿論のこと、利休の創造的獨創性などもさまざまに形で示され、宗二独特の利休像が描き出されているのである。

さて、利休が武野紹鷗に入門したのは、天文九年(一五四〇)、十



九歳の時のことである。利休の茶の湯への覚悟とその傾倒ぶりは並大抵のものではなかった。入門時の利休の行為や決意の程は、幾つかの逸話として伝えられている。利休の最初の修行は、宗二が孔子の「論語」に倣って記述した年代稽古に従えば、「茶湯仕様 十五カラ卅迄ハ萬事ヲ任ル坊主也」と、すべてを師匠に任せて、師の教えのままに従う修行であった。天文十三年二月二十七日、二十三歳の時、利休は称名寺の住職惠達房と松屋久政を招いて最初の茶会を催した。善好香炉を床に飾り、珠光茶碗・釣瓶水指を用いて茶を点てた。この時の座敷は、「廿五年以来紹鷄之時二回」じ四畳半であった。

利休が珠光茶碗を用いたのは、珠光縁の称名寺住職を招いたことにもよるが、利休のお気に入りの茶碗であったからである。利休はその後暫くは連統的に珠光茶碗（一回は高麗茶碗）を使用する。珠光茶碗は「唐物茶碗也 ヒシヲ色 ヘラメ廿七在」る下手物に近い青磁茶碗である。珠光の侘び茶に心酔した利休は、珠光の愛用した茶碗を自分も愛用し、茶の湯の侘び化を開始したのである。珠光に寄せる利休の賛仰の念を無視することはできない。古田織部は、「昔より今ニ珠光おらずバ数寄者無之。珠光名人という事（ヲ）利休以前ハ合点も難行処ニ、宗易出て一入珠光名上る也」と記している。珠光を侘び茶の開山と提唱したのは利休であり、利休がいなかったなら、珠光の存在は薄れたままであった。また永禄三年（一五六〇）十二月六日、床の掛け物といえはまだ唐絵を掛けるのが主流であった時、利休は圓悟の墨蹟を使い、珠光の侘び茶を高く評価すると同時に、墨蹟を侘び茶の主要な掛け物にまで高めた。圓悟の墨蹟は、「珠光一休和尚ヨリ被申請 墨蹟ノ懸始也」。利休は、永禄十二年には開山の墨蹟（珠光の愛用した圓悟）を千貫という巨額で購入し、珠光への敬愛の念を深めるとともに、珠光を侘び茶の開山として揺るぎない存在に高めた。この墨蹟の「法語ハ禪宗眼也」とある。天正十年以降になると、利休は了庵清欲・東陽徳輝・春浦宗猷などの墨蹟を使用する一方、大徳寺の古溪宗陳の墨蹟を掛けるようになった。当時は中国の傑僧の墨蹟を尊重し、それ

を掛物としていたが、そのような時に、利休は古溪宗陳という生存する禅僧の書いたものを茶掛けとしたのである。

今日の茶会では、床には必ず掛物が掛けられ、茶会の必須の要素となっているが、桃山時代では掛物を使用しない場合が多かった。当時の茶会の回数と掛物の使用回数を列挙すると、次のようになる。

『天王寺屋日記』、「宗達茶湯日記、他会記」、天文十七年十二月から永禄九年一月二十三日迄、茶会の回数四三七回、絵の使用一〇六回、墨蹟の使用六六回、色紙の使用三回

『宗及茶湯日記、他会記』、永禄八年九月二十二日から天正十三年十月二十日迄、

茶会の回数八九〇回、絵の使用一三八回、墨蹟の使用一二九回、色紙の使用一七回

『宗凡茶湯日記、他会記』、天正十八年五月から同年十二月二十九日迄、

茶会の回数四一回、絵の使用二回、墨蹟の使用五回

『松屋会記』、「久政茶会記」、天文二年三月二十日から天正十九年二月迄、

茶会の回数三八四回、絵の使用七六回、墨蹟の使用五六回、色紙（定家ハンノコトハ）の使用 四回

『久好茶会記』、天正十四年四月十九日から同十九年十二月二十七日迄、

茶会の回数五八回、絵の使用三回、墨蹟の使用五回、色紙の使用二回、紹鷄文一回

『宗湛日記』、天正十四年十一月から慶長十一年十月迄、

茶会の回数四四八回、絵の使用二二回、墨蹟の使用四九回、定家色紙の使用一一回、太閤の御詠歌の使用二回

『利休百会記』、天正十八年八月十七日から翌年閏正月二十四日迄、絵の使用一回、墨蹟の使用二八回

墨蹟の使用回数が時代の経過とともに増え、絵の使用を遥かに上

回っているが、それでも掛物の使用が少ないのには驚かされる。『南方録』の「掛物ほど第一の道具ハなし、客・亭主共ニ茶湯三昧の一心得道の物也、墨蹟を第一とす」、この言葉を熟知している者にとつては、何か奇異なものを感じられる。道具の中で掛物が第一であり、なかでも墨蹟が最も大事であるという思想は、「利休の没後、織田有楽や小堀遠州の茶会記において実現されるのであつて、桃山時代にはまだ墨蹟第一の発想は少なかつた。ただ唯一、それを実行していたのは利休で」あつた。しかも利休は、生存する禅僧（大徳寺の）の墨蹟をも茶掛けとして使用したのである。

武野紹鴎は、「惣別茶湯ノ風躰依為從禪宗出悉ク學」、「茶湯ハ禪宗ヨリ出タルニ依テ僧ノ行ヲ專ニス 珠光 紹鴎悉禪宗也」と記されているように、また大林宗套より

曾弥陀結無疑印

宗門更転活機輪

量知茶味与禅味

吸尽松風不意塵

と称えられたように、「茶禪一味」の境地に達していた。利休もまた、師匠である紹鴎に倣い、二十代で大林宗套の門を叩き、禪の道の修行にも励んでいた。「道陳 宗易ハ禅法ヲ為眼ニ」。

天正三年正月朔日、堺の南宗寺で住持の笑嶺宗訢を中心にして禪問答が行われた。その問答の克明な記録は「仙嶽宗洞答問二十一條」として現存している。この記録を読むと、当時の堺衆と禅宗との係わり、千宗易・津田宗及・山上宗二などの茶人たちの禪に対する造詣の深さなどを窺い知ることができる。

この禪問答に参加した人数は二十一名である。前半の十三名は春屋宗園などの僧侶、中間の七名は宗易・宗及・宗二など、剃髪してはいるが、在俗の衆である。最後の問答にあつた人物は、「仙嶽宗洞答問二十一條」の筆者、侍者宗登である。宗登は「師初め諱の字を登に作る。後二洞に改む」とあるように、仙嶽宗洞のことである。

師問て曰く。昨夜虚空神夢中に到て云く。歳旦の令辰、和尚例に随つて、旧の話を擧揚し、大衆を勸辨し了れ。きよう然して夢覺む。記得す。江西の馬大師因に、龐蘊居士問う、萬法与侶為らざる者はれ什麼人ぞ。請う、首座一語を下せ、看ん。

首座云く、今日入室す。梅根は宇宙に蟠、枝乾坤に茂る。

師曰く、意旨如何。

座云く、能く萬像の主と為り、四時を遂て凋まず。

師曰く、大師答て云く、汝が一口に西江の水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道わん。

意旨作麼生。

座云く、費盡す。老婆多少の力を。

師曰く、更に道え。

座云く、錦心繡口人に向つて開く。

師打して曰く、謬ず、第一座為り。

禪問答はこのようにして進み、第十四番目に利休の順番となる。

禪人云く、鯉趨りて庭を過ぐ。

師曰く、意旨如何。

禪人云く、活鱗々地。

師便打。

第十八番目は宗及の順番である。

禪人云く、大力量の人。

師曰く、力量底 「如何是れ大力量の人」。

禪人云く、盡大地。撮し來たるに粟米粒の大いさの如し。

師便打。

第十九番目は宗二の順番である。

禪人手を拍つて云く、此れ聲聞梵天。

師曰く、如何なるか是れ此聲聞。

禪人云く、木人鼓を打ち、石女起つて舞う。

師曰く、舞底。

禪人云く、遊戲神通「無為無事の故に」。

師便打。

僧俗一体となつての禪問答である。僧侶なら当然かも知れないが、在俗の者にこれ程の問答ができるとは、誠に驚くべきことである。當時の堺衆の中には、本格的に禪の精神を極めようとする者が大勢いたのであろう。

千利休は師の教えのままに従う修行を重ねながらも、侘び化への熱意に駆られて、茶の湯精進は留まることが知らなかった。

#### 四、すべてのことを師匠にする

釣瓶水指の使用も侘び化を進める道具のひとつである。釣瓶 面桶 竹之蓋置 此三色 紹鷗好ミ被出候」とあるように、井戸の水を汲む釣瓶を水指に転用したのは、武野紹鷗である。最初に紹鷗が風呂あがりに、そのあがりやにて青竹の蓋置とともに用いたのである。利休は師匠の工夫を活かし、夏の風呂上がりがかりではなく、最高の格式を持つ口切の茶会にもこの釣瓶水指がふさわしいとした。利休は、紹鷗に倣った修行を重ねながら、一方では、絶えず茶の湯の草体化・侘び化を工夫し、深めていたのである。

弘治元年（一五五五）十月、武野紹鷗は「五十四而遠行 茶湯ハ正風躰之盛ニ死去ナリ 物ニタトウレハ吉野ノ花ノ盛ヲ過テ 夏モ越シ 秋ノ月 紅葉ニ似タリ」とあるように、紹鷗は茶の湯の正風体の真つ盛りの時に亡くなった。その茶の湯の風体を物に譬えて言うなら、吉野山の花の盛りを過ぎ、さらに夏も越し、秋の月、照り映える紅葉に似ている。今井宗久は紹鷗の死去した当日、十月廿九日、「紹鷗老遠行ノ段、子息新五郎ヨリ申来、直ニ彼宅ヘ罷越候」と記している。利休は紹鷗の亡くなる六カ月前、同年四月朔日、紹鷗・万代屋道安・今井宗久・宗好を迎えて朝会を催した。

一 小板二風炉 釜 雲龍

一 床 牧谿自画賛、手水ノ間ニ卷テ、

一 棚ニ香合 布袋 羽帶

一 キンリンシ茶入 水指 シカラキ カウライ茶ワン メンツウ引切

一 繪、紙ノ内、立一尺三寸五分、横一尺八寸、上下茶、中アサキ、一文字風タイコンノ金紗、露白シ、

この茶会は、利休が師匠紹鷗を招待した最初にして最後の茶会である。床に牧谿の自画賛を掛け、高麗茶碗で茶を点てた。當時はまだ唐物天目で茶を点てる場合が多く、特に師匠を初めて招くような改まった茶会では天目の茶碗を使用するが、利休は斬新な高麗茶碗を使った。高麗茶碗は、後で触れるが、天正年間に入り、茶の湯の侘び化が深まるにつれて、その使用回数が増え、やがては唐物天目を陵駕する主要な茶の湯茶碗となるのである。この朝会の様子から、師匠を迎えて侘び茶に専念する利休の姿を窺うことができる。

尊師を亡くしてから利休は、茶の湯の道を究めるためひたすら努力に努力を重ねた。「茶湯之師匠ニ別テ後師匠ニ用ル覚悟一切ノ上 仏法 歌道 并能 乱舞 刀ノ上左 又下々ノ所作迄モ名人之仕事ヲ茶湯ト目聞トニカ條之手本ニ取也」。「數寄者之覺悟ハ禪宗ヲ可用全也」とあるように、利休は師匠である武野紹鷗に倣って禪の修行に励み、謡いを嗜み（「易謡ハ宮王太夫ノ弟子也」）、和歌・連歌・狂歌も作り（「休居士ハ日野殿ノ歌道門弟ニ成テ、常ニ参ラレケリ」）、武士たちとの交流から刀剣などに関する世間の評判などにも精通していた。利休の茶の湯への覚悟は、すべてを師匠とし、すべての道における名人の所作を茶の湯と目利の手本として採り入れることであった。取り分け歌・連歌の道には念を入れた。

「紹鷗ハ卅ノ年迄連歌師ニ候 三條道遥院殿詠哥大概之序ヲ聞 即茶湯ヲ為分別 名人ニ被成候也 扨後ニ是ヲ密傳ニス 弟子之印可仕程ノ仁ヘ被仰傳候也」とあるように、武野紹鷗は、三条西実隆から藤原定家の「詠哥大概」を伝授され、その和歌の理念を活かし、侘び茶湯

を工夫した。連歌師の里村紹巴は、「其言葉にも情は新しきを以つて先とし、言葉は古きを以つて可用、又云、和哥に師匠無し、古き哥をもつて師とすと候間、古き言葉を御覚被成候へ、奇特の御作意を仰出され候へば、残所なき御連哥に候、御茶湯なども哥道同前と承はり及候、古道具を以（心を）新しく遊場され候事、右に申候定家卿の意に相叶候（哉）、連歌も茶湯も其時其時に随ひて一様にあらず候」（『連歌至宝抄』）と、和歌・連歌と茶湯とが深い関係にあることを指摘している。宗二はこの理念を茶の湯に活かし、「茶湯仕様の儀 習ハ古ヲ可用專ニ 作意ハ新キヲ為專ト 風鉢ハ堪能ノ先達ニ可任ト也 其節々ノ時代ニ相様ニ可分別ト云々」と記している。紹巴は「連歌之仕様ハ枯カシケ寒カレト云 此語ヲ・・・茶湯ノ果ハ如此有度物を那登」と常に口にし、連歌の究極の境地に侘び茶湯の究極を近づけようとしていた。利休もまた紹巴の教えを心に刻み込み、「冷え枯れる」、「冷え瘦せる」、「枯木の雪」などの境地を美的理念とし、また美意識の基調とするようになっていったのである。

##### 五、独自の美意識に基づく創造的行爲

利休は、永祿五年五月二十七日の朝、細口の花入（つるのはし）に花を入れず水ばかりを入れて床に飾った。こうした作意はその後も三度ほど行われた。この作意についてはいろいろの説が立てられているが、利休賞翫の花入をとくと鑑賞して貰うのである。永祿十三年二月三日の朝会では、「ほそ口、持出て、袋ヲ客人のまへにてぬかせて、客二見せられ候、後ニ薄板こひいたして、すべて床へ上候」（『宗及他會記』）。この場合は水も入っていないかった。こうした花入の扱いは、まさに「作分數寄仕様ハ主次第也」である。しかしこうした「珍キ行ハ十度ニ一度ニ度歟・・・但シ人ノ仕タル作ヲハ會以不可似」である。利休だからできるのであり、他の者がこれを真似したなら邪道というものである。永祿十二年十一月二十三日の朝には、一尺四寸の炉を切り、姥

口の平釜を掛けた。この寸法の炉は、前年十月二十七日の朝会で宗二が使っているが、『山上宗二記』には、

四疊半二

一尺九寸五分ノ栗縁 大

囲炉裏ニ姥口之

平釜 自在にて釣 其冬

荒木撰州へ平釜被出

その冬より一尺四寸の炉

になる 真之縁

と記されている。利休が一尺四寸の炉を定めたのである。この寸法の囲炉裏は、天正十年以降になると一般に普及し、「當世風」の炉となるのである。

利休が織田信長の茶頭になったのは、天正時代の初年のことである。武野紹鷗に弟子入りしてから三十四・五年経過した頃のことである。

茶湯

師匠ニ成覺悟 茶湯卅年抛子身ヲ

我茶湯ヲ嗜 茶湯之儀坊主ヲせ

マシキトテ逼塞スル目聞ヲハ自

天下カラ呼出す也 又我茶湯ヲハ取亂シ

天下へ出 坊主顔スル者ハ梅雪同

前也

信長の茶頭になってからの利休は、それ迄とは違って、武士たちとの交流を通して茶の湯の侘び化を進め、独自の美意識を獲得していった。

天正八年十二月九日朝、利休は津田宗及と山上宗二を招いた。

一 炉 始而之かま也、かたのたれたる釜也

自在ニ、

一 輝東陽之墨跡、かけて、前二葉茶壺、

但、了眞ヨリ被買壺也、

一 手水間、床二細口、鶴のはし、白梅生而、  
一 ハタノソリタル茶碗 なつめ 前後二茶碗也 切目茶桶

コトウノ合子、ホリ物アリ、

利休は、宗及が見たことのない珍しい「肩の垂れた釜」を掛け、「端の反った茶碗」で茶を点てた。宗及は初めて見る新しい造形美に心を捉えられたようである。この「ハタノソリタル茶碗」は、今日見られる「道成寺」・「勾当」などのような口縁部の開いた、端反りの茶碗であると言われている。これについては後程触れるが、この頃から利休の美意識はその独自性を発揮し始め、創造的行為としてその実体を現し始めたのである。しかし、利休が創作意欲に燃えてその具体的なものを生み出すようになるのは、秀吉の茶頭になつてからのことである。天正十年以降、利休は究極の侘びを追究しながら、さまざまな新しい工夫をこらし、数寄の仕様を生み出していった。つまり「六十一の年より替分別 當世の風鉢二」なつたのである。宗易流が誕生し、「宗易流に数寄之仕様と云う密伝」も生まれたのである。

天正十年は、既に記したように、織田信長が横死を遂げ、豊臣秀吉がその後継者となり、それと同時に信長の茶頭を務めていた利休が秀吉の茶頭へと移行した年である。これを機に、茶の湯執心の秀吉と利休との関係は急速に深まつて行くことになるが、利休にとつて、秀吉の茶頭になつたことは、自分の芸術的才能をフルに発揮することのできる画期的な転機となつたのである。信長の茶頭時代、利休にとつて秀吉は第三者への書状で「羽藤」・「筑州」・「秀吉」などと呼び捨てにできる存在であり、茶の湯に於いては師匠と弟子という関係にあつた。天正十年以降、秀吉が太政大臣・関白という地位に任ぜられると、両者の関係は逆転し、「内府様」・「関白様」・「殿下様」と敬仰の念を持つて呼ぶようになる。しかし、利休の秀吉への臣従意識は希薄であつた。秀吉の茶湯執心が激しくなるにつれ、利休は秀吉にとつてなくてはならない存在となり、実質的には側近としての役割を果たし、政治にも介入するようになった。

天正十四年四月、上坂した大友宗麟が辞去する際、秀吉の異父弟豊臣秀長は宗麟の手をとつて、「……内々の儀は宗易、公儀の事は宰相存じ候……」と伝え、また同じ書状で宗麟は国許の重臣に次のように知らせている。「……宰相殿を頼申候ハてハにて候間、能々御心得可入候、今度利休居士被添心馳走之様子、難申盡候、永々不可有忘却候、此元之儀見申候て、宗易ならては、関白様へ一言も申上人無見及申候、大形二被存候而者以外候、とにかくに當末共秀長公、宗易へハ深重無隔心御入魂、專一候……」。

利休は茶頭という役職にありながらも、秀吉の側近として、政治を始め、様々な面で秀吉の補佐役を務め、驚くばかりの権勢を保持していた。利休は茶頭としての自負と自信のもとに利休独自の理念と美意識をもつて、独特の世界を生み出すことになつた。

利休の創造的行為はまさに驚嘆すべき独創の世界であり、改革的なものであつた。その代表的な創造的行為と言えば、楽茶碗の創作と茶室の縮小化を挙げることができる。

#### 六、楽茶碗の創造と茶室の縮小化

天正八年十二月九日朝、利休が「ハタノソリタル茶碗」を使つたことは既に述べたが、この「端の反った茶碗」は、利休が陶工長次郎を指導して焼成させた楽茶碗である。この楽茶碗は、天正十四年以後今ヤキ茶碗・「ヤキ茶碗」・「黒茶碗」として数寄者から愛好され、小座敷に適応する道具として濃茶にも薄茶にも使われるようになった。独特の技法と形態を持つこの茶碗は、それまでの唐物天目や高麗茶碗に代わつて、茶の湯の中心的茶碗となつた。値が万正に相当する曜変などの建菱は「代カロキ物也」となり、「惣別茶碗之事 唐物茶碗ハ捨リタル也 當世ハ高麗茶碗 今焼茶碗 瀬戸茶碗以下迄 ナリ 比サヘ能候へハ数寄道具二候也」という美意識の転換・価値観の転倒が生じたのである。利休による楽茶碗の創造は、絶対的なものとしてその存

在感を漂わせていたのである。

ここで茶碗の歴史的推移に目を通し、特に天正十年以降、楽茶碗の出現によって茶碗の使用がどのように変わったかを見ておこう。この分類方法は竹内順一氏の「和物茶碗の展開」から教示されたものであるが、天目形と茶碗形（それぞれ和物と唐物・高麗と別ける）に大別し、その使用回数を年代別に纏めあげたものである。

#### 茶碗の歴史的推移

天文二年（武野紹鴎京四条夷堂の傍らに大黒庵を営む）から弘治元年（紹鴎没）まで

##### 天目形

唐物天目 八十一回

和物天目（伊勢）四回

##### 茶碗形

唐物・高麗の茶碗 二十五回（0・3パーセント）

和物（志野・信楽）二回

弘治二年から元龜二年（利休五十歳）まで

##### 天目形

唐物天目 四〇九回

和物天目（伊勢・瀬戸）十五回

##### 茶碗形

唐物・高麗の茶碗 二二三回（0・5パーセント）

和物（備前・志野・伊勢・瀬戸など）十五回

元龜三年から天正九年（利休六十歳）まで

##### 天目形

唐物天目 二二二回

和物天目（伊勢・瀬戸）十八回

##### 茶碗形

唐物・高麗の茶碗 一九六回（0・9パーセント）

和物（志野・瀬戸・備前・黒茶碗など）十四回

天正十年（利休、「六十一」の年より替分別 當世の風躰二なる 此處此一卷の一大事なり、「宗易流」）から天正十九年（利休自刃の年）まで

##### 天目形

唐物天目 一三三回

##### 茶碗形

唐物・高麗の茶碗など 一六五回（1・25パーセント）

和物天目（瀬戸・伊勢）十二回

和物（瀬戸・伊勢・今ヤキなど）一一九回

◆唐物・高麗茶碗には珠光茶碗・人形茶碗・刻み茶碗・染付茶碗・水のみ茶碗・高中茶碗・三嶋茶碗・暦茶碗などが含まれる。天正十年以降の和物茶碗一一九回の内訳は、瀬戸四十七回、志野一回、備前二回、伊勢一回、今ヤキ・ヤキ・クロヤキ・黒茶碗六十七回、そり茶碗一回。天目形より茶碗形の使用が約二倍になっている。

天文年間に濃茶と薄茶の使い分けが行われ、濃茶を唐物天目で、「珠光茶碗ニテ、ウス茶アリ」（『松屋会記』）と記されているように、唐物・高麗などの茶碗で薄茶が点てられていた。茶会記に茶碗の使用を明記することは比較的少なく、濃茶・薄茶の区別を明確に記すことはさらに少ない。概観した場合、天目形の茶碗で濃茶を、茶碗形で薄茶を点てることが中心であり、茶の湯の主流であった。唐物天目（濃茶）と高麗茶碗（薄茶）の組み合わせが圧倒的に多く見られる。天目台付き天目で濃茶を、台を外して薄茶を点てる場合、後年には天目台付きの天目で濃茶を点てる場合などがある。天正十年以降に目立った特徴は、濃茶を高麗茶碗・珠光茶碗・染付茶碗などで点てるようになったこと、和物茶碗が増えたこと、殊に瀬戸茶碗・楽茶碗が頻繁に使われ、それぞれ濃茶・薄茶に両用されていたことである。天正十五年以降は、楽茶碗が主流になったかのように、濃茶・薄茶両用に用いられた。時代

の経過と共に、かつての名碗、萬正の建盞（曜麥・油滴・烏菱・別菱・玳皮菱）や天目（灰被・黄天目・只天目・白天目）の茶碗が「値段の安い物」と敬遠され、茶碗形、特に瀬戸・楽茶碗が尊重され、これが主役になっていく傾向が見られる。以上のことから、「惣別茶碗之事」唐物茶碗ハ捨リタル也 当世ハ高麗茶碗 今焼茶碗 瀬戸茶碗以下迄ナリ 比サヘ能候ヘハ数寄道具ニ候也」という美意識の転換・価値観の転倒が生じたことがはっきりと判る。

次に茶室に関わる利休の獨創性について考察してみよう。

利休の師匠（紹鴎）は四畳半座敷を北向きの「左カッテ」（今日の本勝手）に造った。北向きに造った理由は、昔から茶座敷が会所の裏手に位置した藪の領域、つまり北側にあったことによるのであるが、東・西・南の向きでは朝・昼・夕の日差しが違い、その移ろいによつて道具が粗相に見えてしまう。しかし北向きは「強フアカルウ無キ程ニ、道具眞ニミユルジョウ明ナリ」（紹鴎遺文）であつたからである。これに対し利休は、「南向左カッテラスク 当時右勝手ヲハ不用ト也」と、紹鴎と正反対の南向きにした。つまり、藪の領域から晴れの領域に移したのである。しかも四畳半座敷から三畳敷・二畳半敷・二畳敷・一畳半敷へと、その極限状態にまで縮小し、南側には庇を付け、座敷の周囲を土壁で塗り回し、風炉先窓・下地窓などで座敷内部の明かりを調節した。三畳敷は紹鴎の時代にもあつたが、「無道具 侘数寄」が用いていた。「唐物一種成共持候者ハ四畳半二座敷ヲ」造った。つまり、名物道具は四畳半に飾り置くもので、三畳敷以下の狭い座敷では使えなかつたのである。しかし、利休は「昔珠光被申候ハ、ワラヤニ名馬ヲ繋タルカ好」時には名物道具を粗相な茶座敷に置いてみるのも良いもので、当世風であり、一段と趣深いものであるとした。侘びの精髓に徹したのである。従つて、「関白様御代十ヶ年之内上下悉ク三畳敷 二畳半敷 二畳敷用之」という現象が生じた。しかし二畳敷を使うのは「貴人カ名人カ扱ハ一物モ不持侘数寄敷 此外平人ニハ無用」。利休は京都に一畳半敷を造つた。「当時珍キ事也 是モ宗易一人之外ハ如何」。

天正十四・五年に書かれたと思われる利休の手紙がある。

一 うらのふんをハ早しま

い申候 一服申度と

存候 四条はんをハ

畳をもしき不申候

ふしを付候て おき申候

其うら二 一畳半を

申付候 其分にて湯

一 二度仕候 それも

此比ハおき申候 さくし

成不申候 つひてに

可申付かと存候 おもてをも

出来申候様にと存候 くるす二

高右 飛もしさま

越もしさま

瀬掃 古織 いつれも

ミナ 御言伝申候

恐惶謹言

三月十八日 宗易（花押）

四畳半の座敷（水屋などあり実際には四畳半よりかなり大きい）の裏側に一畳半の座敷を造り、更に前にも小間の座敷を造り、（平面図で）クルス（十字架）になるようにしたいという文面である。キリシタンである高山右近・蒲生氏郷、キリシタンに共感している細川忠興・瀬田掃部・古田織部の存在を意識した書状だけに、「くるす二 出来申候様にと存候」という記述は、当時の利休の気持や、自在に創意・工夫を凝らしている利休の姿を彷彿とさせてくれる。

秀吉はこうした一畳半座敷を嫌い、二畳敷に直させたと言われているが、この究極の空間は「利休一人だけのことであれば、当代随一の

目利であるのだから、どんなことをしても面白い。普通の人があることをそのまま真似したなら、邪道というものであり、茶の湯とは言えないものになってしまう。利休は「山ヲ谷 西ヲ東ト」人と正反対のことをし、茶の湯のきまりを破り、自由自在に物を扱っている。座敷にしても、茶碗にしても、世俗の常識を打ち破り、伝統に反逆し、利休独自の世界を創り出したのである。

#### 七、究極の侘び数寄を求めて

豊後の大友義統の宿老、浦上長門入道道冊（宗鉄）は、天正十六年三月二十日付の書状（国元の若林中務入道道閑宛）で、当時の堺・大阪の茶湯の様相を詳細に伝えているが、秀吉の使用した道具類についての感想を次のように記している。

其許にてハ宗易の作に候竹之蓋置、又めんつう・つるへ・今焼茶碗、皆々すたり候由申候、聊も誠にハなく候、既 関白様御沙汰候間、御推量可有候

豊後では、それ迄流行していた利休流の道具はもう廃れてしまったと風聞されていた。しかしそれは間違いで、京都・大阪・堺で依然として利休流の道具が使われていること、しかも利休好みの道具の使用は「関白様御沙汰」であったことを知らせる書状である。

長閑堂久保利世は、利休の出現によって茶の湯の様相が一変してしまつたとして、次のように記している。

宗易ハ秀吉公の御師にして、しかもその才智、世にすぐれたる人なれハ、天下おしなへ、此下智をまなはずと云事なし、後は利休居士と申し、さる程に、昔の名物とも、皆おしこミすたり、茶湯あらたまり、昔の圍爐裡八寸六寸を四寸になをし、ふち壹寸壹分、土段壹寸壹分、土段の内九寸六分にして、釜は九寸の谷と定められし、この時、有馬の湯本にありし阿弥陀堂の釜をもとめて、その釜の移し、世にあミた堂と号してはやれり、くさり自在もす

たり、皆五徳すへとなり、茶具、今焼茶碗、茶入に聚大中小有て、清甫と云ぬしせり、……墨蹟に古溪和尚、則、利休の参徒也、掛物ハハひろきハ富貴也とて、壹尺二三寸有、大文字も二行とあれハ、みくたして又みあけあしとて、一くたり物はやれり、表具もひかりかやくはたふときとて、皆紙表具、或ハほけんと云物にてする也、萬事手かるく、さひたるを本とせらるる也、世間のわひに心をつけ、又、道具もたても、遍く茶湯のなるへき事をしめして、道におもむかせんためとも云也、其外、……

天正十六年以降、利休流の侘び茶の湯は、「當世の風躰」になつたのである。

『山上宗二記』では茶人のあり方が次のように記されている。

#### 古今唐物ヲ

集 名物之御嚴り全ク數寄人ハ大名

茶湯ト云也 又目聞ノ茶湯モ上手ニテ

世上數寄ノ師匠ヲ仕テ過ルヲ身ヲハ

茶湯者ト云 又侘數寄ト云ハ 一物モ不ル

持タ者 胸ノ覺悟一ツ作分一ツ手柄

一ツ此三ヶ條調ル者ヲ云也 又唐物モ

持チ 目モ聞 茶湯モ上手 右ノ三ヶ條モ

調リ 一道ニ志深ケレハ名仁ト云也

利休は目利で、茶の湯の点前も上手にでき、茶の湯を教えて生活している「茶湯者」であり、名物の唐物を持ち、道具の極めも良くでき、「大名茶の湯者」・「茶の湯者」・「侘數寄者」の各要件をも備えており、更に數寄一筋の道に深い志を抱いている名人である。しかし利休には茶湯者・名人を超越した、さらに追究すべき別の世界があつた。「茶湯名人ニ成テ之果ハ道具一種サヘ樂ハ彌侘數寄力專也」。この侘數寄は無用なものをいっさい削ぎ落とした、「冷え枯れた」侘びの世界であつた。これは連歌の究極の世界であるが、紹鴎は、茶の湯の究極もこのようにありたいものだ、といつも語っていたという。利休の心には師



匠の言葉が痛烈な響となつて伝わっていた。

「茶湯ノ習」二十年稽古ノ後、印可ヲ仕時、小壺ノ茶ノ立様ヲ相伝也。それは、侘び茶の大切なことや、趣深いことなどが小壺の扱い方に含まれているからである。宗二は、師匠から茶の湯の秘伝を伝えられた時、利休から「歌道に於ける『古今和歌集』の秘事伝授や、能楽に於ける乱拍子の秘事伝授と同じように、武野紹鷗も辻玄哉に茶の湯の秘事を伝授していた」と言われた。紹鷗の語ったことは、利休の心の中で確実に活かされていたと言う事ができる。

利休は、「ケカサシトオモフ御法ノ共スレハ、世ワタルハシトナルソカナシキ」という慈鎮和尚の歌をいつも口吟んでいたという。茶頭となつて主君から扶持を貰い、茶の湯で身を立てている自分に腹立たしさを感じていたようである。秀吉の茶頭という職業を放棄することもできず、茶湯者と究極の侘び数寄者との間に立つて、ジレンマに陥っていた。「爛鍋ひとつで、生涯煮炊きをしたり、茶の湯をしたりして、楽しんでいた、心のきれいな」栗田口善法のような侘び数寄者を羨ましいと思ひながらも、秀吉の茶頭という職業が利休の桎梏になっていたことは確かである。この頃の利休の心境を伝える興味ある逸話がある。

「近キ昔ノ事ナリケル、サル家元宗匠ヲ茶ノ湯ニ招キシ茶人アリタリ、客組モ皆ソロヒモソロヒシ心オキナキ友ノミナリ、袴付ヨリ外露次へ、ヤガテ迎付アリテ席入シ、イツモノ如ク炭モスミ、懷石ニナリタルニ、今日ノ連客ハ誠ニ親シキモノノミニテ主客互ニ打トケ兄弟ニモ比スベキカタラヒニテ興ワキ酒ススミ、イヨイヨ盃モ重サナリヌ。サテ主人モ余リノ心嬉シサニ、客ノススメノママ自ラモ膳持出シ相伴トナリ、サシツ、オサヘツ、ハヅミテ、茶事ノムツカシサナド夢ニモ思ハズ真ノ酒筵ノヤウニナリ、謡ナドモ出テ、ソレ大盃ヨ、グヒ呑ヨト、ハテシナク皆々十二分ノ大酩酊トハナリヌ。サレド名ニシオフ大茶人ノコトトテ湯次モ出デ主人モ千鳥足ナガラ無事膳モ撤セラレ菓子モ出デ中立トナリヌ、客ハ内待合へ休息サレ、ミナミナ待合ニテ

ヨキ氣持ニテ高ラカニ語リアヒ、賑々シカリケル。シカルニ、程ヲ經、時ウツリテモ一向鳴物モナク、迎付モナシ如何セラレシナラン、サテハ酩酊ニテ少シハ暇取りモスルナラン、コチラモユルユルノ方ヨロシカラシナドトマタ落付キテ煙草ヲケムラシテ待居タルガ何ノ音沙汰モナク、余リノ長キニ今ハ待チアゲミテ、ハヤ酔モ醒メハジメタレバ、互ニ顔見合セテ如何スベキヤ、母屋ノ方モサシテ変リタル様子モナク、誰レカ勝手へ参リ内輪ノ有様ヲ窺ハンモノカナドト申アフ、否々ソレハ、余リ家内ノ人ニモアシカリナン何カ名案ハナキヤ主人ニ異変モアラザルヤト談シ合ヒ、心利キタル人、足ドリ、モドカシクヌキ足サシ足シテ席ヘソトユキ、連子ノ障子少シ明ケテ打覗ケバ、コハシタリ、床ニハ目覚ル計リノ花イケラレタルガ、亭主ハ床ノカマチヲ枕ニシテ高イビキ連モヨキフリ、華胥（かしよ）ノ夢ノ真最中、アアト驚キアハテテ待合ノ面々ヘソノ由カクト申伝ヘケレバ、皆々目ヲムキ口ニ手ヲアテ笑ヒ合ヒケル、ソノ時家元宗匠曰ク、アア、カクテコソ真ノ樂シキ茶ノ湯ナリ、数寄者ノ茶ノ湯ナルベシ、さてさてこの屋ノ主人ノ境涯、コソ羨ヤマシキ極ミナリ、吾等茶道ヲモテ業体トナシ、人ノ師範タルモノハカカル茶ノ湯ハトテモ出来マジ、又ナスマジキナリ、サレド数寄者ナレバコソカカルオモシロキ茶トハナリヌ、如何ニシテモヨキ境涯ナルカナトテ感嘆セラレケル、トテモノコトニ皆ノ衆、茶ハ還ルサニ余ガ宅ニテモ参ラスベケレ、茶ハナクトモ今日ノ茶ノ湯ハマタトナキ秀逸ゾカシ、折角ノ主人ノ寝入バナライカデカ起サンヤト皆々目と目デ知ラセ袖ヲツラネ静カニ外露次ヨリ暇シテ帰ラレケル。ソノ後数日ヲ經テコノ主人、コノ連客ヲ招シテ改メ茶ノ湯ヲ催サレヌ、如何ナル茶ノ湯ナリシヤハ読者ノ推量ニマカサンノミ。」

天正十六年九月四日朝、利休は聚樂屋敷の四疊半座敷で台子を用いた茶会を催した。

客 春屋和尚 末国師以前ノ時也

玉甫和尚

古溪和尚 太閤御前悪候て西国へ後座候之時

本覺暹存

一 台子ノ茶の湯ノ義、昔ノフニテ 今ノ世ニハ数寄ヘモ不出トテ、利休居士ハ以外キライにて候ヘ共、此度は上様ヨリ生島虚堂ノ表具仕直候へと御諒にて、利休座敷にてハ、上々ハハオンミツノ義にて、和尚、会ヲホンソウノギマテ也。

物別和尚ノ会ノ御來会ニハ、数寄ニかまわず台子、台目ニて御茶タテ候也。大徳寺も如斯也

一 座敷ひかしむきノ四帖半、四尺ノ床、タウコ棚有。北方ニ横窓。東ノくくりの上に窓二つ大小有

一 床ニキタウノ文字

木葉辞柯霜氣清

虎頭戴角出禪局

東西南北無人処

急々帰來語此情

七言四句ノし也

台子ノ内

一 ニヨウ足風呂ニ アラレ釜

一 かねノ文さしたる水指

一 柄杓立、金ノ物ニ柄杓立候

一 水コホシカウシ 金ノ物

一 蓋置ハコトク

一 棚ノ上、台目四方盆ニ、尻ふくらの茶入袋ニ入

この茶会は、古溪宗陳が秀吉の怒りに触れて九州に流される送別の茶会であると云われていたが、米原正義氏はこれを古溪宗陳理想の茶会と断定された(「天下一名人 千利休」参照)。

利休はこの茶会で大徳寺縁の虚堂智恵の墨蹟を床に掛けた。この墨蹟は「此一軸天下ノ名物也 昔堺幾嶋所持也」と、『山上宗二記』に記された秀吉秘蔵の名物であった。当時この墨蹟は、秀吉から表具直しを依頼され、利休が預かっていたものである。この預かり物(秀吉

秘蔵の名物)を秀吉に断りも無く、内密にして使った。秀吉の居城で、秀吉から追放された古溪和尚を偲び、秀吉秘蔵の預かり物を使つての茶会であつた。秀吉の知るところとなれば、どのような激昂を買うか判らない。「息づまるばかりの会」「鋭い激しい茶会」などと言われる大胆不敵な茶会であつた。また天正十八年九月十日昼、利休は同じく聚楽屋敷の書院に大徳寺総見院の球主座と博多の神屋宗湛を迎え、台子で茶を点てた。

書院ニテ、上段ノラシ板ニ天神名号懸テ、ソノ前ニクリクリノシヨク台ノ上ニ、青磁ノ角ナル香炉置、シヨク台ノ下ニ、古銅ノ花生ニヲ車一本入テ、脇ノ方ニ、台子ノ茶湯アリ、カナ風炉 アラレ釜 カネノ水指 ヒシヤク立カネ 蓋置 竹ノ引切 上ニハ黒茶碗ハカリ置、中ニ台子ノサキノカベニ春甫ノ文字懸テ、

先振舞アリ、ソノ後ニ、

一 茶ノ時ニ、内ヨリ棗、袋ニ入持出テ、前ニ置テタテラルル、茶ノ後ニ、又内ヨリセト茶ワン持出テ、台子ノ上ノ黒茶碗ニ取替ラルル、黒キニ茶タテ候事 上様御キライ候ホトニ、此分ニ仕候ト也、

一 墨跡ハ、横ニ文字ニ七アリ、口ニ吹毛ト書出サルル、上ニ丸印、下ニ角印、合テニアリ、上下丹イロノ帑、一文字金ラン也、

一 名号ハ、ヒタリ字ニ右字ヲマセテ有、筆者ハ薩摩衆、年少カクト也、

一 手水鉢ハ、大キナル丸キ石堂也、ヒシヤク、アオノケテ也、利休は秀吉が黒茶碗を嫌っていることを十分承知の上で、台子に黒茶碗(黒楽茶碗)を飾り、それで茶を点てた。その後改めて瀬戸茶碗を持ち出し、「上様御キライ候ホトニ」とわざわざ断つて瀬戸茶碗で茶を点てた。利休は天正十五年正月十二日の朝会の雑談で、同じく神屋宗湛に「内赤ノ盆ハ、赤ハ雑ナルココロ也、黒ハ古キココロ也」と伝

えていたが、こうした言動や作意は秀吉を激怒させる反逆行爲である。そのことを十分に意識した、利休の強烈な自己主張である。この時の利休は、秀吉の茶頭という職業を半ば放棄した侘び数寄者であった。江岑宗左の『伝聞事』によれば、当時利休は、秀吉の意向に反した作意を時々していたようである。

一、休、一畳半致シ被申候 大甲御意ニ不入候故 二畳敷ニ致シ、路地之外ニかきして白壁ニシテ松植被申候、是も御意ニ不入なおし被申候、又門ノ上ニかく上被申候、是も御意ニ不入、おろし被申候、其時ヨリ少ツツ御意ニちかい被申候

天正十九年二月四日、利休が秘蔵の茶壺「橋立」を大徳寺聚光院に預けた折りの「橋立文」・「横雲文」については、すでに軽く説明したが、利休が「橋立」は生涯死ぬまで人手に渡すまい、秀吉には絶対に手渡さない、命をかけても守り通すのだという覚悟は、「橋立」への愛着であり、晩年の利休にとつては秀吉への反抗心、理不尽な追求を加える秀吉への強烈な抵抗でもあったのである。

世俗に妥協し、茶の湯の師匠に安住していたなら、利休はさらに生き存えたであらう。しかし究極の侘び数寄の世界を求める利休は、自己のこだわりをすべてぶち破り、枯木寒巖の世界を求めて自刃していったのである。

# 註

【山上宗二記】と茶会記からの引用文には、いちちその出典を示さなかった。茶会記は左記のものを使用した。

【天王寺屋会記】——「宗達茶湯日記」(他会記)、「宗及茶湯日記」(他会記)、「茶道古典全集」第七卷(淡交社刊) 所収

【天王寺屋会記】——「宗達茶湯日記」(自会記)、「宗及茶湯日記」(自会記)、同全集第八卷所収

【松屋会記】——「久政茶会記」、「久好茶会記」、同全集第九卷所収

【今井宗久茶湯日記抜書】、同全集第十卷所収

【影印本 天王寺屋会記】(淡交社刊)

(1)「瓊林居士山上宗二」、「茶道雜誌」(河原書店刊)、昭和六十二年九月号所収

(2) 渡辺誠一著「山上宗二の世界」(河原書店刊)

(3) 米原正義著「天下一名人 千利休」(淡交社刊) 所収

(4) 谷晃著「茶会記の風景」(河原書店刊)

(5) 茶の湯懇話会編「山上宗二記研究」(三徳庵刊)

(6) 小松茂美著「利休の手紙」(小学館刊)

(7) 熊倉功夫補訂「茶道四祖伝書」(思文閣出版社刊)

(8) 熊倉功著「山上宗二の生涯と茶の湯」(山上宗二記研究) I (三徳庵刊)

(9) 石田雅彦著「天正三年正月南宗寺問答と堺の茶人たち」(法政史学) 第四十七号 所収

(10)「南方録」戸田勝久著「南方録の展開」(平凡社刊) 所収

(11) 註(3)の書 写真より

(12)「利休大事典」(淡交社刊)

(13) 註(3)の書 所収

(14)「長閑堂記」、「茶道古典全集」第三卷所収

(15)「茶道せせらぎ」第三卷 第五号、堀内宗完全著「茶事の心得」(主婦の友社刊) 所収

(16) 堀口捨巳著「利休」(鹿島研究所出版部刊)

(17) 千宗左監修「江岑宗左茶書」(主婦の友社刊)